

はばたきインクル支援だより



深谷はばたき特別支援学校 令和元年12月1日 No.15



「障害は個性だ」ということを一度は耳にしたことがあると思います。これは障害個性論と言います。1950年代からすでにあるようです。東京オリンピックを来年に控え、パラスポーツをTVで見る機会も増えました。障害のあるトップアスリートのパフォーマンスを見ると、障害を克服し、障害も個性の一部として生きている姿を感じます。

小中学校や高校へ支援に行く時に、診断の出ているお子さんよりも、診断の出ているお子さんにたくさん出会います。私たち教員は医師ではないので、診断をすることはできません。「ADHD でしょうか？」と尋ねられても、お返事をする事ができません。先生方には「こういう特性がおありのようですね」とお伝えしたり、WISC などの検査を通して「〇〇に弱さがあるようなので…」と説明をしています。

そのようなお子さんについて話し合う時に、「個性ですから」というお話を耳にすることがあります。今回は、お子さんの状態を「個性」ととらえてよいのか、考えてみましょう。

特集 障害と個性

1 個性とは何か？

辞書には次のように説明されています。

個人または個体・個物に備わった、そのもの特有の性質。(デジタル大辞泉)
個人を特徴づけている性質・性格。その人固有の特性。パーソナリティー(三省堂 大辞林)

次に進む前に、皆さんそれぞれご自身の個性は何かを少し考えてみましょう。

2 個性ととらえることの問題点

障害を個性ととらえることには次のような問題点があると考えられます。

(1) 支援が必要な場合でも、曖昧にされてしまう。

小学校低学年での話です。Aさんはディスレクシア(読字障害)の傾向が強く、教科書を読んだり、黒板をノートに写すのが大変な様子が見られました。保護者は教科書を拡大コピーし、行間を広くしたものに作り替えてよいか尋ねてきました。また字を書くのが大変だったので、少しの文字をしっかりと書けるように量を加減してほしい、と頼んできました。ところが先生は、「それはAさんの個性ですよ。Aさんだけ特別扱いはできませんよ。」と返事をしました。

このようなやりとりを通して、個性という言葉で合理的配慮がなされないケースは多く目にします。

(2) 子どもの実態から目をそらしてしまう。

保育所での話です。Bさんはまわりの友だちと一緒に遊べません。友だちと同じ場にいることはできますが、砂場では、友だちがみんなと一緒に山を作ったりトンネルを掘っていても、その横で、砂場の枠に砂をさらさらとかけているだけです。砂場に友だちの置いたシ

ヤベルやふるいがあっても、見えていないかのように踏んで通り過ぎてしまい、トラブルになってしまうことがあります。

保護者はその様子を心配されて、保育士に相談しました。「それはBさんの個性ですよ。成長しているからみんなと同じ場にいられるんです。大丈夫。見守りましょう。」と言われました。その時は安心しましたが、対応は特に言われず、どんどん就学の日が近づき、不安が増すばかりです。

このように障害を個性ととらえると、現実的にお子さんがどういう状態なのか、何に困っていて支援を必要としているのかを考えることが、先延ばしにされてしまう危険性があります。また遅れや障害を認めたくない保護者の気持ちが、個性という言葉によってより頑ななものになってしまうこともあります。

3 個性ととらえることのメリット

成長が期待できる時には、肯定的な気持ちを込めて個性ととらえることができると思われます。才能に近い意味で使われることが多いようです。

例えば次のような場合です。

- ・ 一度聴いただけで、この曲が弾けるんだね。すばらしい個性の持ち主だね。
- ・ 本を読むのが好きなんだね。本を読みながら高学年の漢字もどんどん読めるようになっていくんだね。その個性は伸ばしていきたいよね。

また障害のある当事者が自身のことを「個性が強い」と言うことがあるようです。例えば、乙武洋匡さんの『五体不満足』には「障害は個性であるという言をよく耳にする。ボクには、なんだか、くすぐったい、健常者には、ただの強がりに聞こえる場合もあるようだ。今では、単なる身体特徴にすぎないと思うようになった。」とあります。これには障害というハードルを下げたいという思いがあるようにも考えられます。「障害は個性である」という言葉に救われる思いをした当事者もいると思われます。

4 障害は個性か？

学校や保育所などで個性という言葉が安易に使ってしまうと、現実を見ようとせずに、個性という言葉で片付け、問題を先送りすることになってしまいます。保護者とのトラブルを避けたり、指導力不足を責められるのを恐れたり、障害に関する知識が乏しかったり、具体的な手立てが見つからなかったりすることが背景にあるのかもしれない。

私たちは個性で差別されることがあるでしょうか？ 困ることがあるでしょうか？ 一番最初にみなさんに投げかけさせていただいた「あなたの個性」で、このような思いをしたことはありますか。

個性という言葉で一時しのぎをした時に、困るのは誰でしょうか。子どもたちは現実困っています。困っていることにすら気付けないで日々生活をしているのかもしれない。そういう状況をもたらしているのは個性とは言えないはずですよ。

特別支援教育が始まり、はっきりとした診断がない場合には「特性」という言葉を使うことがあります。特性という言葉によって、子どもたちは一人ひとりの特性に応じた合理的な配慮を受けることができるようになりました。

WHO が 2001 年に出した ICF (国際生活機能分類) の考え方では、支援を考える際に、子どもたちの状態を個性とはとらえず、人と人との関係や、環境との関係という視点からとらえるようにしています。個性を語る時に、子どもの特性やそこで困っていることを十分に考える機会を持つことが大切です。

